

エルサルバドル共和国における太鼓腹の石彫

伊 藤 伸 幸

1. はじめに

太鼓腹の石彫はメソアメリカ南東部太平洋側に特徴的な石彫である¹。スペイン語では Barrigon, Obeso, Gordinflón, Panzudo、英語では Potbelly などと表記され、腹部が膨らんだ石彫を指し示している。また、太鼓腹の石彫はメソアメリカの広域でみられる。

太鼓腹の石彫に関しては1878年の記録が初めてである。ハーベルが、サンタ・レティシアの石彫3基を報告している (Habel, 1878; Parsons, 1986)。モーズレイは、グアテマラ市にあった農園の入り口に置かれていた太鼓腹の石彫2基を報告している (Maudslay, 1889-1902)。また、モーリーはホンジュラスのコパン遺跡の太鼓腹の石彫を報告している (写真3a, Morley, 1920)。ロスロップは、この種の石彫の特徴を、「丸彫りで、太った胴部、一般に幅広の首飾りが回っている短く太い首を持っている。顔はどっしりとして粗雑で深い線刻で表現されている。脚部は樽のように膨れた胴部の基部で地面と平行に曲がっており、腕部は肘を曲げてわき腹を抱きしめている。」としている。メキシコ湾岸やニカラグアの石彫と比較し、胴部に円盤状部分を持つ石彫はチャクモールの原型である可能性を考えている (Lothrop, 1926)。リチャードソンは、コパン遺跡の太鼓腹の石彫をニカラグアのチョロテガ地域の石彫の影響を受けているとしている (Richardson, 1940)。マイルズはモンテ・アルト遺跡の表採土器から太鼓腹の石彫は先古典期のオルメカ以前である可能性を論じている (Miles, 1965)。ヒラルドはモンテ・アルトで出土した太鼓腹の石彫5基から考察している。他の文化の影響を受けていないことを理由として、オルメカ文化に先行する文化に属すると考えている (Girard, 1968)。ピニャ・チャンは太鼓腹の石彫にみられる完成されていない技術からオルメカに先行する石彫と考えている (Piña Chan, 1972)。ナバレテは、モンテ・アルト遺跡で太鼓腹の石彫の上にある層から出土する土器が先古典期後期であることや、関連する土器が先古典期中期までしかさかのぼらないことから、先古典期中期から先古典期後期までの間の石彫と考えている (Navarrete, 1977)。パーソンズは、メソアメリカ南東部太平洋側の石彫を集成した研究で、石彫の様式分析とサンタ・レティシア遺跡調査の成果からモンテ・アルト様式 (太鼓腹の石彫) をオルメカ文化よりも後と考えている (Parsons, 1981, 1986)。カッシーラーとイチョンはタカ

¹ 1992年に考えていた“太った神像”(大井1992; 伊藤1992)という名称は古典期の“太った神”と混同するために、本稿では使用しない。

リク・アバフ遺跡の石彫を分析している。そのなかで、タカリク・アバフ遺跡以外に、メキシコチアパス州からエルサルバドルまでの太鼓腹の石彫が出土した遺跡を挙げている。また、太鼓腹の石彫の特徴は、空を見上げ、手は腹部に置き、足が折りたたまれていることとし、時期はモンテ・アルト遺跡の事例から先古典期末としている (Cassier y Ichon, 1981)。デマレストはサンタ・レティシア遺跡の発掘調査から、太鼓腹の石彫と関連する土器が先古典期後期の時期を示しており、この石彫はオルメカ文化の終末期とするのが適切であるとしている (Demarest, 1986)。スコットは、正確な時期は不明であるが、太鼓腹の石彫は先古典期としている。唯一、モンテ・アルト遺跡11号記念物は関連する土器から先古典期後期 (紀元前500-200年) であると考えている。また、この石彫に施される装飾を他の地域と比較して、古典期までの石彫と考えている (Scott, 1988)。ハッチは、様式の変化とオルメカ様式の石彫との比較、そしてモンテ・アルト遺跡とカミナルフユ遺跡の発掘事例から、モンテ・アルト様式の石彫の編年を試みている。先古典期後期から古典期前期の石彫としている。始まりは、先古典期中期末の可能性を提示している (Hatch, 1989)。ロダスはグアテマラで出土している太鼓腹の石彫を集成し、考察している。そのなかで、モンテ・アルトとカミナルフユの石彫は異なる様式を持つと考えている。モンテ・アルト様式は顕著な眉間と組まれた足が、カミナルフユ様式は人の足とは思えない石彫基部に廻らされる脚部が特徴としている。また、オルメカ文化に起因する美術的な変化が生み出した石彫とし、先古典期後期に社会の複雑化とともに出現したと考えている。そして、太鼓腹の石彫の起源はグアテマラのエスクイントラ県にあるとしている (Rodas, 1993)。チンチヤは、図像学的な視点を取り入れて、古典期にみられる太った神と太鼓腹の石彫の関係を考察している。また、横位ホゾ付き頭部石彫も太鼓腹の石彫としている (Chinchilla, 2001-2002)。ガーンジーは、頭部だけのモンテ・アルト様式石彫だけでなく、タテ杭付の頭部石彫も含めている。また、先古典期中期から後期の過渡期に太鼓腹の石彫は屋内祭祀から公共祭祀へと移行する際に創られたと考えている (Guernsey, 2012)。

太鼓腹の石彫が最初に報告された時期、この石彫と中間地域やメソアメリカの石彫との比較を試みている。その後、この石彫が他文化からの影響を受けていないことなどから、オルメカ文化に先行する文化の石彫と考えた。しかし、発掘調査が実施され、関連する土器が先古典期中期から先古典期後期までの時期に属することが分かると、この石彫は先古典期中期—先古典期後期に位置づけられた。一方、1990年代以降、グアテマラを中心として太鼓腹の石彫を集成する調査や社会の複雑化若しくは精神文化と関連付ける研究もみられる。しかし、最近の研究では、胴部が無い石彫の場合でも、太鼓腹の石彫の顔に似ている頭部を持つ石彫を太鼓腹の石彫としている。太鼓腹の石彫は頭部から脚部までである丸彫りの石彫と頭部のみを持つ人頭像と認識している。しかし、全身の石彫と人頭像のそれぞれの機能や用途はいまだに明らかになっていない。

本稿では、メソアメリカ南東部太平洋側で独自の文化を形成したと考えられるエルサルバド

ル西部（伊藤 2016, 2017）における太鼓腹石彫の機能や役割などを考察する。以下では、太鼓腹の石彫とされる石彫のうち、人頭像、タテ杭付人頭像、横位ホゾ付き石彫を除き、頭部から胴部もしくは脚部までを表現した丸彫りの太鼓腹石彫を対象とする。

2. エルサルバドルの太鼓腹石彫

パス川よりも東に位置するエルサルバドルにおいて、太鼓腹石彫が出土している遺跡をみると、エルサルバドル西部に限られる。エルサルバドルの太鼓腹石彫はアマロリによれば5基（Amaroli, 1997）、ガーンジーによれば6基（Guernsey, 2012）である。後者にはタパルシュクツ遺跡出土のタテ杭付人頭像が含まれている（Amaroli, 2002; Escamilla, 2002）。ガーンジーは胴部を持たない頭部のみ石彫でも、モンテ・アルト様式の太鼓腹石彫の顔の部分と似ている石彫を太鼓腹石彫として挙げている。本稿では、本来の特徴である腹が出ている胴部を持つ石彫を太鼓腹石彫とする。このため、アマロリが挙げている石彫5基を分析の対象とし、ガーンジーが太鼓腹の石彫としているタパルシュクツ遺跡のタテ杭付人頭像は項を変えて考察する。また、腹部が膨らんだ胴部を持つ石彫であるチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区出土

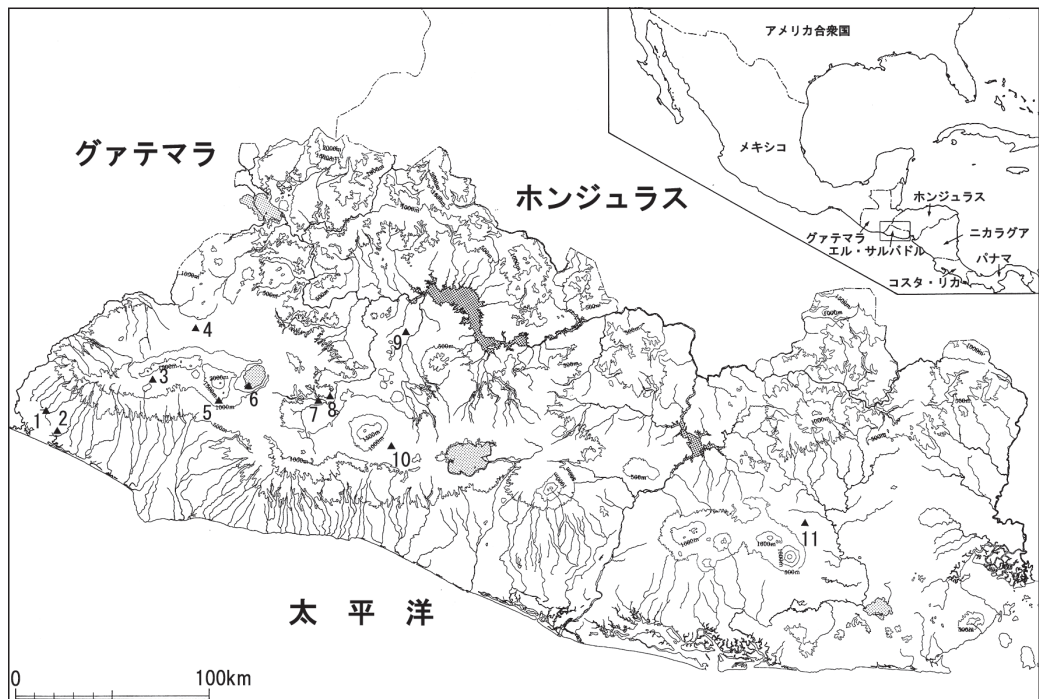


図1 エル・サルバドル主要遺跡と太鼓腹石彫出土遺跡

1. カラ・スシア、2. エル・カルメン、3. サンタ・レティシア、4. チャルチュアパ、5. タパルシュクツ、6. テオパン島、7. サン・アンドレス、8. ホヤ・デ・セレン、9. シワタン、10. クスカトラン、11. ケレバ

座像1基を含める。

エルサルバドルでは、腹が膨らんでいる胴部を持つ太鼓腹石彫は、西部に限られる。チャルチュアパ遺跡2基、サンタ・レティシア遺跡3基、テオパン島遺跡1基である。合計すると、3遺跡6基が太鼓腹石彫に相当する(図1)。

(1) チャルチュアパ遺跡

先古典期前期から後古典期まで続く都市遺跡である(図2)。エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマルなどの地区に分かれている。太鼓腹石彫はエル・トラピチェ地区とカサ・ブランカ地区で2基出土している。従来考えられている石彫は7号記念物だけであるが、カサ・ブランカ地区で出土した座像は腹部が膨らんでおり、太鼓腹石彫とする。

7号記念物：53(高)×23(幅)×25(奥)cm

腹部が顕著に膨らんでおり、頬も膨らみを持っている(写真1a)。両手は腹部を抱えているが、指の表現はみられない。モンテ・アルト様式石彫の特徴である分厚い目蓋は無く、目は閉じているのか空いているのかは不明である。両耳は顔の横に平面形が楕円になるように彫られている。石彫の正面と側面は整形され彫りこまれているが、背面は殆ど手が加えられていない。また、胴部下はあまり手が加えられた痕跡がなく、脚部の表現がみられない。

エル・トラピチェ地区にある最大の建造物E3-1の階段上部から出土した(図2)。建造物を構成する石の間にあった。コロス期(紀元前900-650年)とされる。

座像：97(高)×61(幅)×62(奥)cm

腹部が膨らんでいる。両手を耳のあたりに当てている(写真1b)。手の指は表現されておらず、手が楕円形状に整形されている。顔は上を向いて、正座している。口鼻目は整形されているが、細部が不明瞭である。カサ・ブランカ地区E3-8建造物の盗掘坑から出土したとされる。しかし、詳細な出土状況は不明である²(図2)。

(2) サンタ・レティシア遺跡

先古典期後期に栄えた遺跡である。太鼓腹石彫は、3基出土している。3基ともアパネカ山がある西を向いて南北方向に約17mずつ離されて配置されていた(図3、Demarest, 1986)。

1号記念物：160(高)cm

球形の石の表面に彫刻が施されている。大きな球形のお腹をL字に曲がった腕で抱えている(図4b、写真2a)。指は不規則な線刻で分けられ、4若しくは5本の指が確認できる。お腹の中央に、中央が凹んだ大きく盛り上ったヘソが彫られている。顔はやや上を向いている。顔は腫れぼったい目蓋が目の部分を覆い、鼻口耳が浮彫りされている。両目蓋の上にはやや小

² アマロリ氏のご教示による。Marco Tulio Escalante氏の案内で、この石彫が出土した盗掘坑を調査したときの情報を提供していただいた。

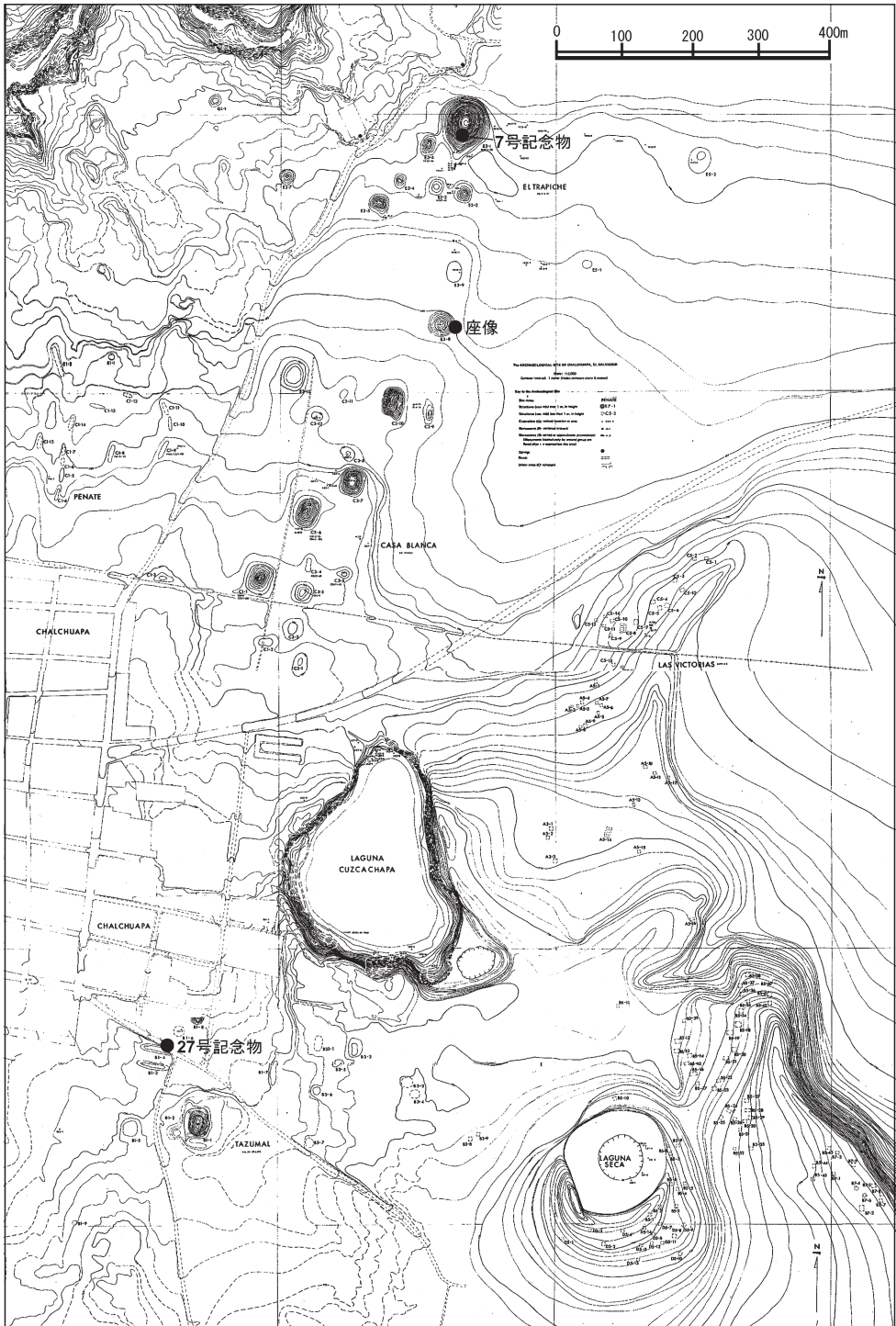
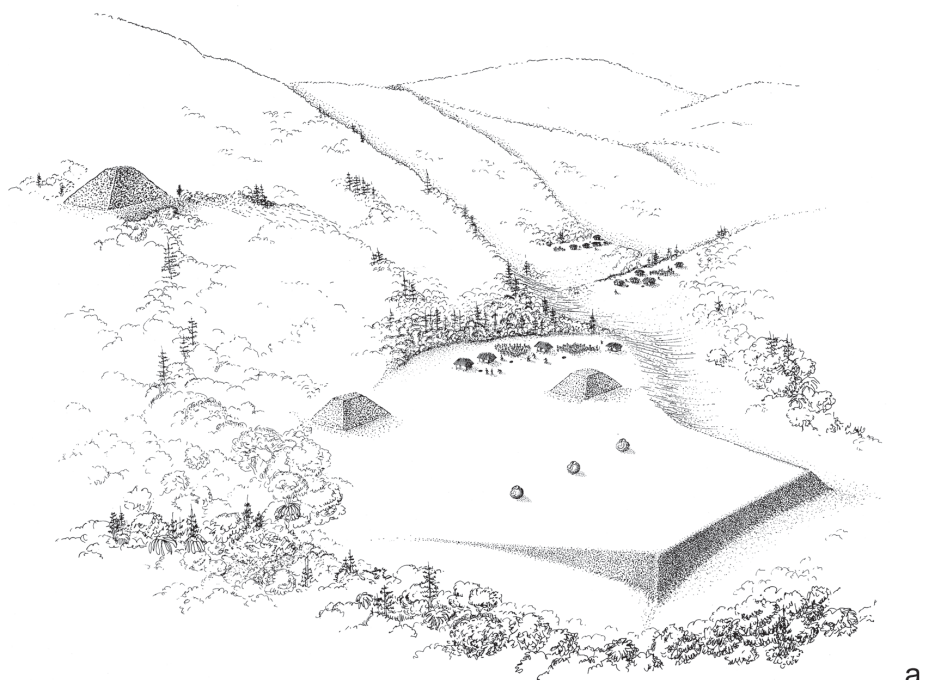
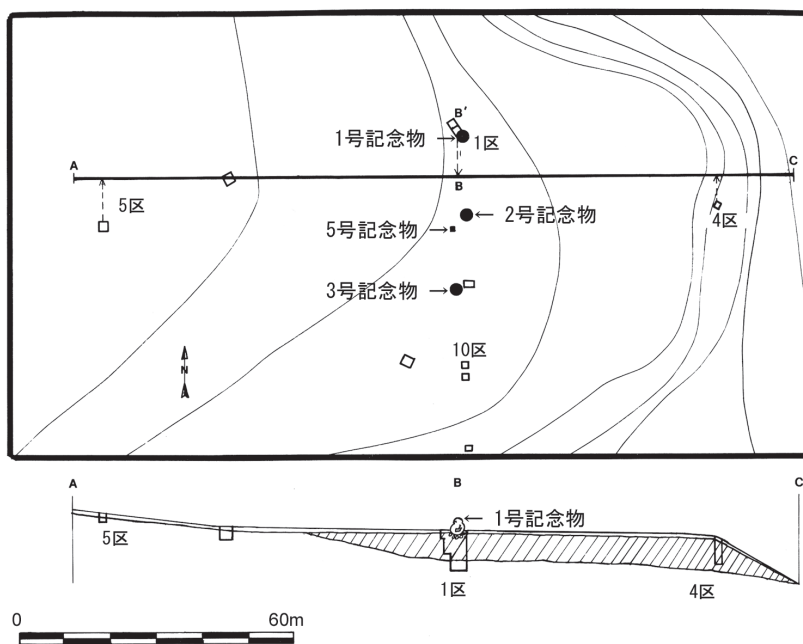


図2 チャルチュアパ遺跡群石彫出土位置図 (Sharer, 1978を改変)



a



b

図3 サンタ・レティシア遺跡石彫配置図

a. 復元想定図、b. 石彫配置平面図・断面図 (Demarest, 1986, figs. 40, 23 を改変)

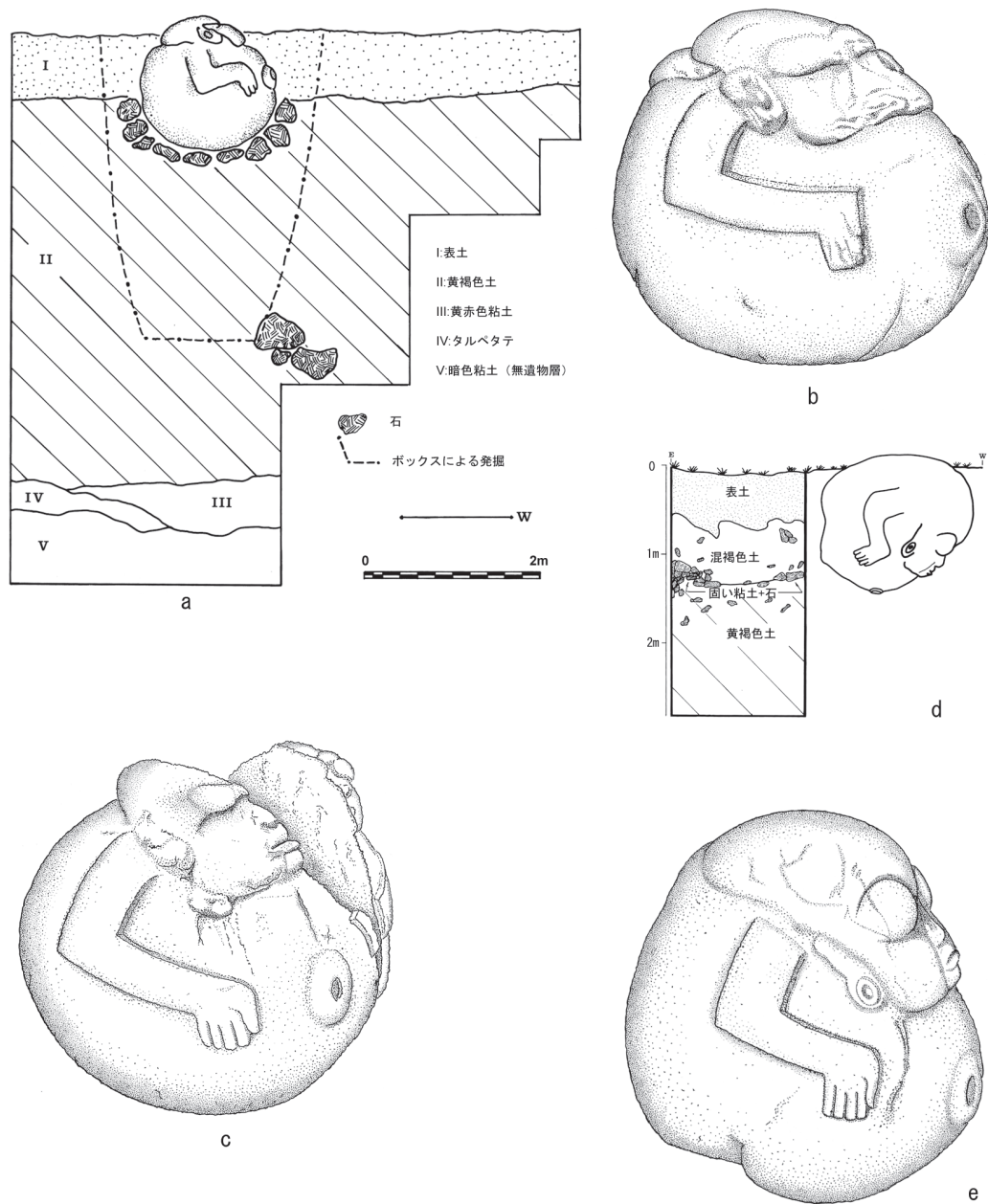


図4 サンタ・レティシア遺跡出土石彫と出土状況

a. 1号記念物出土層位図、b. 1号記念物、c. 2号記念物、d. 3号記念物、e. 3号記念物出土層位図
(Demarest, 1986, figs. 22, 7, 11, 13, 24を改変)

さなくぼみがある。耳の下部には穴が穿たれており、3号記念物と同様の耳飾り、若しくは耳飾りを付ける穴の可能性がある。脚部は表現されていない。

ボグスが発掘した部分の再発掘によると、チュル期（紀元前400-100年）の床面を埋めた後に、テラスを造り、カイナック期（紀元前100-紀元後250年）に置かれた。石の基礎部分の上に石彫は乗っていた（図4a、Demarest, 1986）。

2号記念物：200(高)cm

1号記念物と同様に、球形の石に彫刻が施されている。大きな球形のお腹をL字に曲がった腕で抱えている。指は5本表現されている（図4c、写真3b）。1号記念物と同じヘソがお腹の中心に表現されている。顔は、分厚い目蓋が目の部分を覆い、口鼻耳が浮彫りされている。1号記念物同様に脚部は表現されていない。割れて出土した。

3号記念物：180(高)cm

1・2号記念物同様に、球形の石に彫刻が施されている。大きな球形の腹部をL字に曲がった腕で抱えている（図4e）。指は5本表現されている。分厚い目蓋が目の部分を覆っている。鼻口は浮彫りされている。両耳下部に環状耳飾りが浮彫りされている。1・2号記念物同様に盛り上がったヘソが彫られているが、脚部は表現されていない。顔を下にして出土した（図4d、写真2c）。

（3）テオパン島遺跡

コアテペケ湖にあるテオパン島の浜辺で出土した（図1、Amaroli, 1997）。

石彫：97(高)×80(幅)×60(奥)cm

大きなお腹を両手で抱えている（写真3b）。指は4本ないし5本、表現されている。顔は目鼻口が浮彫りされている。足は右足を上にして胡坐を組んでいる。報告者は、もともとあった分厚い目蓋に穴を彫って目を整形し、肩から胸に垂れ下がる部分は乳房を表現していると考えている（Amaroli, 1997）。

潰された頭頂の上に1mぐらいの土がかぶっていた。関連して出土した土器と土偶はチュル期からカイナック期（紀元前400～紀元後250年）に相当している（Amaroli, 1997）。

（4）エルサルバドル西部における太鼓腹石彫の特徴

サンタ・レティシア遺跡出土太鼓腹石彫3基とテオパン島遺跡出土石彫は、顔が上を見ている。一方、チャルチュアパ遺跡出土石彫2基は顔面がやや傾斜しており、前方上を見ている。モンテ・アルト様式の特徴である目を覆う厚い目蓋は、サンタ・レティシア遺跡3基にみられる。また、アマロリの解釈通りならば、テオパン遺跡出土石彫も当初は目を覆う目蓋があった。チャルチュアパ遺跡出土石彫2基は、目の部分があり明瞭ではない。7号記念物の目の部分はやや盛り上っている。これが目蓋を表現しているならばモンテ・アルト様式の目

を覆う目蓋に相当するかもしれない。手の位置をみるとチャルチュアパ遺跡出土座像を除いて、全てが膨らんだ腹部を抱えるように腕・手が表現されている。チャルチュアパ遺跡出土座像は耳の位置に両手を置いている。脚部についてはチャルチュアパ遺跡出土座像とテオパン島遺跡出土石彫以外は、表現されていない。チャルチュアパ遺跡出土石彫は正座しており、テオパン島遺跡出土石彫は胡坐を組んでいる。

衣装と装身具については、殆ど表現されていない。唯一、サンタ・レティシア遺跡3号記念物には、環状耳飾りが表現されている。テオパン島遺跡出土石彫には乳房とされる肩部から垂れさがる三角形の部分がある。カミナルフユ遺跡60号記念物にも同様な表現がみられるが、衣装の一部である可能性が高い。テオパン島遺跡出土石彫をみると、乳房の位置にしてはやや肩に寄り過ぎており、カミナルフユ遺跡の事例と同様に肩から胸の部分の覆う衣装の一部である可能性が高い。

3. 頭部が太鼓腹の石彫に類似するタテ杭付頭部石彫

エルサルバドル西部では、太鼓腹の石彫の頭部に似ているタテ杭付頭部石彫が2基出土している。1基は、ガンジーがモンテ・アルト様式の太鼓腹の石彫に含めているタバルシュクツ遺跡出土石彫である。もう1基はチャルチュアパ遺跡27号記念物である。

(1) タバルシュクツ遺跡

タバルシュクツ遺跡では石彫7基が出土した（図1）。そのうちの1基がタテ杭付頭部石彫である。

石彫：78(高)×36(幅)×35(奥)cm

上部の人頭像と下部のタテ杭に分かれる（写真4a）。人頭像は頭全体を楕円形に整形し、タテ杭部と分けている。半球状に盛り上がった目、そして、鼻と口が浮彫りされている。タテ杭部は円柱状に整形しており、下部はやや丸く整形している。

考古学調査ではなく工事によって出土しているため、出土状況の詳細は不明である。報告者は建造物の横に並んで置かれていたと考えている。石彫7基以外に、柱状玄武岩、素面の石碑、素面の祭壇が出土している。近くからコロス期の土器（クツマイ土器群、紀元前900-650年）と土偶（ゴメス式、紀元前600-350年）が出土している（Amaroli, 2002）。先古典期中期～後期にこれらの石彫が属する可能性がある。

(2) チャルチュアパ遺跡

太鼓腹石彫2基の他、タテ杭付人頭像が出土している（図2）。

27号記念物：98(高)×44(幅)×43(奥)cm

くぼみによって目と口を表現している（写真4b）。頬は膨らんでいる。右側には耳が表現されている。ヘルメット状頭飾りが線刻されている。また、モンテ・アルト様式の太鼓腹石彫の顔にみられるような二つに割れた眉間がある。タスマル地区にある球戯場 B1-4の北側から出土した（Sharer, ed., 1978）。

（3）エルサルバドルにおけるタテ杭付頭部石彫の特徴

タパルシュクツ遺跡出土石彫とチャルチュアパ出土石彫はともにモンテ・アルト様式の太鼓腹石彫と似ている部分がある。目に注目すると、タパルシュクツ遺跡出土石彫はやや球形の突起で表現しており、モンテ・アルト様式石彫が持つ分厚い目蓋とは異なっている。この球形の目の表現はチアパス高地のオホ・デ・アグア遺跡出土祭壇（古典期後期）にもみられる（Bryant, 2008）。祭壇形石彫に表現される死者を表す目には、半球状に浮彫りした目、円形に虚ろにした目、円形に線刻した目がある（伊藤 2015）。一方、チャルチュアパ遺跡27号記念物は目の部分に穴が明けられ虚ろになっており、同遺跡出土の様式化されたジャガー頭部石彫（伊藤 2016, 2017）を考慮すると死者の目を表現している可能性がある。モンテ・アルト様式では、分厚い目蓋が目を覆うことにより死んでいることを表現している。しかし、ジャガー頭部石彫のように死者の表現として目の部分を虚ろにする石彫もある。このため、死者の表現として、分厚い目蓋や虚ろになっている目もあると考える方が適切である。従って、太鼓腹石彫でも特徴となる目を覆う分厚い目蓋の代わりに表現があることも考慮する必要がある。また、各地域で死者の目の表現方法を分析する必要がある。一方、前述の石彫2基は全体の顔がふくよかであり、太鼓腹石彫の頭部の特徴を持っている。チャルチュアパ遺跡27号記念物は、線刻で鼻口を表現しており、太鼓腹石彫の鼻口の表現と類似している。また、モンテ・アルト遺跡などでみられる二つに割れる眉間が表現されている。

4. 太鼓腹石彫とタテ杭付人頭像

太鼓腹石彫は、タテ杭にあたるような部分を持っていない。どこにでも設置し、容易に動かすことができる。一方、タテ杭付人頭像は杭を埋めて立てることにより初めて機能し、移動は難しくなる。このために、タテ杭付人頭像はどこに設置するかが重要になる。例えば、同じエルサルバドル西部においてタテ杭を持つ石彫の事例をみると、非常に短い杭部分となるが、ジャガー頭部石彫はその一例となる。この形の石彫は、上部が動物の頭部を表し、下部がホゾ若しくは短い杭状になっている。チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区では、原位置で出土した。この石彫は、神殿の階段正面に2基が並んで配置されていた（伊藤 2016, 2017）。また、ホゾ若しくは杭部分は石彫の上部を床下の土中で支えて石彫を固定して機能させる部分である。

タバルシュクツ遺跡では、ジャガー頭部石彫3基、タテ杭付頭部石彫2基、他に石彫2基が出土したとされる。また、建造物の横に並んで配置されていた可能性が報告されている (Escamilla, 2002; Amaroli, 2002)。これらの石彫のうち、ジャガー頭部石彫3基は顔面部下のホゾ若しくは非常に短い杭を埋めて、顔面部が空を仰ぐことになる。一方、前述のタテ杭付頭部石彫1基は人頭像である。杭部分を埋めて使われたとするならばその顔は前方をみることになる。もう一基は動物を象したタテ杭付動物頭部像であるが、杭を埋めて立てたとすると、顔は上を向いていたことになる。盗まれてしまった石彫2基がどのような石彫であったかは不明であるが、それ以外の石彫5基はタテ杭付人頭像を除いてすべてが上を見るように配置されていたことになる。

チャルチュアパ遺跡27号記念物についてみると、タスマル地区にある球戯場の北側から出土している。この石彫は、頭部下にタテ杭部にあたる棒状部分を持っている。これが、タテ杭と同様な役割をしていたとするならば、球戯場の北側に立っていた可能性がある。また、顔は上を向いていることになる。球戯場は古典期に属するために、27号記念物が先古典期に属するならば、再利用となる。

5. 太鼓腹石彫のエルサルバドル西部における役割

エルサルバドル西部にみられる太鼓腹石彫は、チャルチュアパ遺跡2基以外は、全てが上を向いている。一方、チャルチュアパ遺跡出土石彫2基は、前方やや上を見ている。エルサルバドル西部の太鼓腹石彫は、上を見ることが重要であった。つまり、エルサルバドル西部に限定されるジャガー頭部石彫と同様に、太鼓腹石彫は空若しくは太陽との関係が深いと考えられる。

エルサルバドル西部の西境にあるパス川を越えるとグアテマラになる。この地域における太鼓腹石彫の出土状況は異なる。タカリク・アバフ遺跡では、先古典期の建造物やテラスの階段前に太鼓腹石彫は置かれており、建造物側ではなく外側に向いている。カミナルフユ遺跡では、建造物に関連して配置されている太鼓腹石彫は、建造物正面に置かれている場合が多い。カミナルフユ遺跡では、先古典期の石彫が古典期に再利用されていたことを考慮する必要はあるが、主要な建造物との関係をみると、エルサルバドルとグアテマラを分けるパス川をはさんで太鼓腹石彫の役割に相違がある。

一方、チャルチュアパ遺跡とサンタ・レティシア遺跡の太鼓腹石彫の出土状況を検討すると、太鼓腹石彫はジャガー頭部石彫とそれぞれが補完する関係にあった。

チャルチュアパ遺跡では、時期的に太鼓腹石彫が早く、その後にジャガー頭部石彫が置かれた。太鼓腹石彫が先古典期中期に階段上部に設置され、その後に階段中段あたりにあった素面の石碑（4号記念物）等と共にジャガー頭部石彫が先古典期後期に配置された。チャルチュ

アパ遺跡エル・トラピチェ地区において原位置で出土したジャガー頭部石彫は、太陽の運行と関連して配置された（伊藤 2016, 2017）。ジャガー頭部石彫と関係が深い太鼓腹石彫も太陽の運行と関係して配置された可能性がある。7号記念物についてみると、チャルチュアパ遺跡最大の建造物である E3-1 建造物の南側正面階段部分の頂部に近い地点から建造物を構成する石の間から出土している。この石彫はタテ杭部を持っていないが、胴部下に延びる棒状部分があった。これが、タテ杭と同様な役割をしていたとするならば、階段部分に立っていた可能性がある。そして、ジャガー頭部石彫との関係をみると、太鼓腹石彫（7号記念物）が建造物の階段上部に位置し、その階段が下りきった部分にジャガー頭部石彫がある。太鼓腹石彫がより上の神殿若しくは太陽に近いところにあった。従って、ジャガー頭部石彫は神殿に向かうものを迎える役目があり、更にその上で太鼓腹石彫が待っていた。

一方、サンタ・レティシア遺跡では、主となる石彫は太鼓腹石彫である。南北に連なるように3基の太鼓腹石彫が配置されていた。一番北に配置された1号記念物は分厚い目蓋に少し穴があげられていた。真ん中の2号記念物は、石彫自体が2つに割れていた。そして、一番南側にあった3号記念物は倒れて下向きに出土した。これら変工若しくは損傷を受けた3基は何か儀礼的に意味があったか、それともこの遺跡が衰退するときにこれらの石彫に関する事件が起こったことを示すのであろうか。また、ジャガー頭部石彫（5号記念物）は、2つに割れた2号記念物の西側の表土から出土した。ジャガー頭部石彫は太鼓腹石彫に関する儀礼を実施した際に、置かれたのであろうか。そして、より様式化が進んだ4号記念物も太鼓腹石彫が出土した地点から東でみつがっている。これらのジャガー頭部石彫はサンタ・レティシア遺跡では、太鼓腹石彫の機能を補完若しくは補助するような2次的な役割を果たしていた可能性が考えられる。

エルサルバドル西部では、太鼓腹石彫はジャガー頭部石彫と深い関係にあり、互いに補完する関係にあった。そして、各遺跡で重要な建造物と関連して配置されていたことを考慮すると、政治や儀礼的な場面で大きな役割を果たしていたと考えられる。

6. おわりに

エルサルバドル西部では、太鼓腹石彫がパス川より西の地域とはやや異なった様相を呈していた。この地域の特徴としては、脚部の表現があまりみられない。また、サンタ・レティシア遺跡のみであるが、球形に近い石を彫りこんで、浮彫りに近い状態で胴部にへばりついた様になっている頭部を持つ。これ以外に、モンテ・アルト様式の太鼓腹石彫と共有する要素としては、上若しくは前方やや上を見る顔、膨れた腹、その腹を抱える両腕が挙げられる。

一方、上を見上げる顔は、幾つかのグアテマラの太鼓腹石彫にもみられる。また、メソアメリカ南東部太平洋側地方以外でもみられる特徴である。メキシコ中央部ショチテカトル遺跡で

は、太鼓腹石彫の顔は前方やや上を向いている。メキシコ湾岸地方では太鼓腹石彫ではないが、上を見上げている頭部を持つ石彫がある。トレス・サボテス遺跡G記念物、ラ・ベンタ遺跡11、56号記念物、アロヨ・ソンソ遺跡1号記念物などである（De la Fuente, 1973; Stirling, 1943）。明らかに天を向いている石彫とやや上を見ている石彫とがあるが、その意味は明確にされていない。もし、ジャガー頭部石彫が上を向いていることと太陽の運行と関連がある（伊藤 2016, 2017）のならば、太鼓腹石彫も空を仰いで太陽が東から出現し西で没し天界と地下世界を廻れるように見守っていることも考えられる。また、エルサルバドル西部における太鼓腹石彫の機能が上もしくは空を見ることと関連しているならば、ただ前方を見ているタバルシュクツ遺跡出土タテ杭付人頭像は、この地域で出土している太鼓腹石彫とは機能が異なる。同様に、太鼓腹石彫の顔に似ている顔を持つ横位ホゾ付き石彫は建造物の一部となっていた（伊藤 1999）と考えられ、別の機能を持っていた可能性が高い。

ところで、カミナルフユ遺跡10号記念物4面に顔を持つ頭部石彫は、モンテ・アルト様式の太鼓腹石彫の顔の特徴を4面の顔が持っている。カミナルフユ遺跡には、他に4つの顔を持っている石彫2基があるが、モンテ・アルト様式の太鼓腹石彫とは顔が異なっている（伊藤 2016、写真7, 8）。一方、モンテ・アルト遺跡では太鼓腹石彫の顔を持つ頭部だけの石彫がある。以前、メキシコ湾岸における巨石人頭像と太平洋側の大型人頭像との関係を論じた（伊藤 2011）。メソアメリカ南東部太平洋側では、メキシコ湾岸の石彫をそのまま取り入れるのではなく、モンテ・アルト遺跡出土の大型人頭像は巨石人頭像の要素と太鼓腹石彫の要素を統合してできたとも考えられる。つまり、グアテマラ太平洋側における巨石人頭像の現地化が起こったと考えるのが良いであろう。そして、カミナルフユにおける4面顔面付き祭壇を考慮すると、メソアメリカ南東部太平洋側では太鼓腹石彫という概念をそれぞれの都市若しくは集落で取り入れるときに、その地における最も相応しい方法で適応させた石彫を製作したのではないだろうか。つまり、メソアメリカ南東部太平洋側では、外来の石彫の概念を取り入れるときに、その地に適応させた形で受け入れたということが考えられる。その一例として太鼓腹石彫がある。

また、チンチヤが考えた太った神の祖型としての太鼓腹石彫は、先古典期後期から古典期後期までの系譜を明確にする必要がある。そして、横位ホゾ付き石彫やタテ杭付人頭像などにみられる太鼓腹石彫の顔の意味は、その形の石彫の機能や用途を分析することにより明らかにできると考えられる。今後の研究課題としたい。

謝辞：この調査の経費は、2017年度科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽）「DNAを文化人類学的視点から読み解く研究」17K18525）の一部が使われました。

参考文献

- Amaroli, Paul
1997 “A Newly Discovered Potbelly Sculpture from El Salvador and a Reinterpretation of the Genre.” *Mexicon* 19 (3): 51–53.
- Amaroli, Paul and Karen O. Bruhns
2002 ““Jaguar Face” Sculptures Found in El Salvador.” *Mexicon* 24 (5): 91.
- Bryant, Douglas Donne
2008 *Excavations at Ojo de Agua, an Early Classic Maya Site in the Upper Grijalva Basin, Chiapas, Mexico. Papers of the New World Archaeological Foundation* 69, Brigham Young University, Provo.
- Cassier, Jacques y Alain Ichon
1981 “Las esculturas de Abaj Takalik.” *Anales de la Academia de Geografía e Historia de Guatemala* 55. Guatemala: 23–49.
- Chinchilla, Oswaldo
2001–2002 “Los barrigones del sur de Mesoamérica: The Potbellies of Southern Mesoamerica.” *Precolombart* 4 (5): 9–23.
- De la Fuente, B.
1973 *Escultura Monumental Olmeca*. Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D. F.
- Demarest, Arthur A.
1986 *The Archaeology of Santa Leticia and the Rise of Maya Civilization. Middle American Research Institute* 52. Tulane University, New Orleans.
- Escamilla, Marlon
2002 *Informe Preliminar del Sitio Arqueológico Tapalshucut, Departamento de Sonsonate*. Museo Nacional de Antropología “Dr. David J. Guzmán”, San Salvador.
- Girard, Rafael
1969 *La Misteriosa Cultura Olmeca: Últimos Descubrimientos de Esculturas Pre-Olmecas en Guatemala*. Empresa Eléctrica de Guatemala, Guatemala.
- Guernsey, Julia
2012 *Sculpture and Social Dynamics in Preclassic Mesoamerica*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Habel, S.
1878 *The Sculptures of Santa Lucia Cosumalwahuapa in Guatemala. Smithsonian Contributions to Knowledge* 269, Washington, D.C.
- Popenoe de Hatch, Marion
1989 “A Seriation of Monte Alto Sculptures.” In *New Frontiers in the Archaeology of the Pacific Coast of Southern Mesoamerica*, edited by Frederick Bove and Lynette Heller, pp. 25–42.
- 伊藤伸幸
1992 「マヤ南部地域の石彫」『特別展マヤ—歴史と民族の十字路口—』、pp. 47–49.
1999 「マヤ南部地域でみられる横方向にホゾが付いた石彫」『名古屋大学文学部研究論集』45 (134) : 55–94.
2011 「メソアメリカにおける巨石人頭像と大型人頭像」『名古屋大学文学部研究論集』57 (170) : 65–86.
2015 「メソアメリカ南東部太平洋側のヒトの顔が彫られた祭壇についての一考察」『名古屋大学文学部研究論集』61 (182) : 91–116.
2016 「様式化したジャガー頭部」石彫について(1)』『名古屋大学文学部研究論集』62 (185) : 101–123.
2017 「様式化したジャガー頭部」石彫について(2)—メソアメリカ南東部太平洋側における意味を考える—」『名古屋大学文学部研究論集』63 (188) : 47–72.
- Lothrop, Samuel
1926 “Stone Sculptures from the Finca Arevalo, Guatemala.” *Indian Notes* 65: 147–171.

- Maudslay, Alfred Percival
1889–1902 *Archaeology: Biologia Centrali-Americana*. Milpatron Pub. Corp, New York. Photoreprint of the 1889–1902 ed. published for the editors by R. H. Porter and Dulau, London.
- Maudslay, Alfred P. and Anne C. Maudslay
1899 *A Glimpse at Guatemala*. John Murray, London.
- Miles, Suzanna Whitelaw
1965 “Sculpture of the Guatemala-Chiapas Highlands and Pacific Slopes, and Associated Hieroglyphs.” In *Handbook of Middle American Indians* 2, edited by G. R. Willey, pp. 237–275.
- Morley, Sylvanus Griswold
1920 *The Inscriptions at Copan*. Publication 219, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- Navarrete, Carlos
1977 “Aportaciones a la iconografía post-olmeca del Altiplano Central de Guatemala.” *Anales de Antropología* 14: 91–108.
- 大井邦明(監)
1995 『特別展マヤ—歴史と民族の十字路口—』たばこと塩の博物館、東京。
- Parsons, Lee A.
1981 “Post-Olmec Stone Sculpture: The Olmec-Izapan Transition on the Southern Pacific Coast and Highlands.” In *The Olmec and Their Neighbors, Essays in Memory of Matthew Stirling*, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 257–288.
- 1986 *The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast*. *Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology* 28, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.
- Parsons, Lee & Peter S. Jenson
1965 “Boulder Sculpture on the Pacific Coast of Guatemala.” *Archaeology* 18 (2): 132–144.
- Piña Chán, Román
1972 *Historia, Arqueología y Arte Prehispánico*. Fondo de Cultura Económica, México.
- Richardson, Francis B.
1940 “Non-Maya Monumental Sculpture of Central America.” In *The Maya and their Neighbors*, edited by C. L. Hay, R. L. Linton, S. K. Lothrop, H. L. Shapiro, and G. C. Valliant, pp. 395–416.
- Rodas, Sergio
1993 “Catalogo de barrigones de Guatemala.” *Utz'ib* 1 (5): 1–36.
- Scott, John F.
1988 “Potbellies and Fat Gods.” *Journal of New World Archaeology* 7 (2/3): 25–36.
- Sharer, Robert J. (ed.)
1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador* I–III, The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Stirling, Matthew Williams
1943 *Stone Monuments of Southern Mexico*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 138, Smithsonian Institution, Washington, D.C.

キーワード：太鼓腹の石彫、先古典期、チャルチュアパ、サンタ・レティシア、エルサルバドル西部、メソアメリカ

Abstract

El tipo “Gordinflón” en el Occidente de El Salvador

Nobuyuki Ito

En el Occidente de El Salvador, se han encontrado esculturas llamadas “Gordinflón”. Esta forma de barrigudos también se esculpió en varias regiones de Mesoamérica. Sin embargo, hasta la fecha según distintos arqueólogos, el estilo escultórico de Monte Alto tiene varias formas en piedra, como espiga, pedestal, cabeza colosal o portátil y escultura entera en redondo, la cual fue hecha de la cabeza hasta la pierna. Este estudio, solo se enfoca en la escultura del tipo “Gordinflón” en el Occidente de El Salvador, la cual presenta partes corporales y cabeza.

Esta escultura en piedra se relaciona con la cabeza de jaguar estilizado en Chalchuapa y Santa Leticia. Su cara observa el cielo o mira hacia arriba. También se han encontrado cerca de la cabeza de jaguar estilizado. Las ubicaciones del tipo “Gordinflón” se encuentran cerca de la estructura principal del sitio o sobre ella. Por esta razón, esta escultura desempeñó un papel importante dentro de la sociedad prehispánica durante el periodo Preclásico. Sin embargo, en el Occidente de El Salvador no se esculpieron las piernas en la mayoría de los casos, mientras que en Monte Alto, Guatemala, si se esculpieron todas extremidades de la parte corporal.

Keywords: Gordinflón, Preclásico, Chalchuapa, Santa Leticia, Occidente de El Salvador, Mesoamérica



a



b

写真1 チャルチュアバ遺跡出土石彫

a. 7号記念物、b. カサ・ブランカ地区出土座像



写真2 サンタ・レティシア遺跡出土石彫

a. 1号記念物、b. 2号記念物、c. 3号記念物



a



b

写真3 コパン遺跡及びテオパン島より出土した石彫

a. コパン遺跡出土、b. テオパン島出土



a



b

写真4 タバルシュクツ遺跡及びチャルチュアバ遺跡出土石彫

a. タバルシュクツ遺跡出土石彫、b. チャルチュアバ遺跡27号記念物